伊豆の踊子の旅芸人

山本寿夫

(一)

川端康成は「『伊豆の踊子』の作者」で

「伊豆の踊子」の作者であることを、幸運と思ふのが素直であるとはよくわかつてゐる。それになにか言ふのはひがごころであらう。

といひながらも

「伊豆の踊子」が読者に愛される所以の一つは、踊子やその連れの旅芸人にたいする私の感謝を通して書かれてゐるといふことであらう。私の感謝が作品の基調をなしてゐる。素直で単純な感謝である。

と書いてゐる。その「伊豆の踊子」に

途中ところどころ村の入口に立札があつた。

――物乞ひ旅芸人村に入るべからず

といふ二行がある。しかもこの二行は「伊豆の踊子」の最も注目すべき所、作者の感動の中心、「私の感謝を通して書かれ」る、その気持を生のまま表出する所、即ち「少年」に

いはゆる旅芸人根性などとは似もつかない、野の匂ひがある正直な好意を私は見せられた。いい人だと、踊子が言つて兄嫁が肯つた一言が、私の心にぽたりと清々しく落ちかかつた。いい人だと思つた、さうだ、いい人だと自分に答えた。平俗な意味での、いい人といふ言葉が、私には、明かりであつた。

とあるに対応する、「伊豆の踊子」の

暫く低い声が続いてから踊子の言ふのが聞えた。

「いい人ね」

「それはさう、いい人らしい」

「ほんとにいい人はいいね」

この物言ひは単純で明けつ放しな響きを持つてゐた。感情の傾きをぽいと幼く投げ出して見せた声だつた。私自身にも自分をいい人だと素直に感じることが出来た。晴れ晴れと眼を上げて明るい山々を眺めた。瞼の裏が微かに痛んだ。二十歳の私は自分の性質が孤児根性で歪んでゐると厳しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に堪へ切れないで伊豆の旅に出て来てゐるのだつた。だから世間尋常の意味で自分がいい人に見えることは言ひやうなく有難いのだつた。

といふ所に直接続いてゐる。そこでこの立札の文句は、一般に、「ほんたうは村の貧しさを示すものが、ここでは、この物語の甘く軽く流れるのを救つてしみじみとしたものとしてゐる。」とするのは誤解である。少くとも村の貧しさ云云は間違つてゐる。村は貧しく苦しいから物乞ひに恵むものはなく旅芸人に与へるものも無い、お断りだといふのではあるまい。それでは最初から物乞ひも旅芸人も成立しない。村に乏しきを分ち合ふ気持があればこそ物乞ひが入り旅芸人が巡れたのである。しかもここは作者の心象風景的な色合ひの強い伊豆の踊子の自然描写、作者自ら自然は描けてゐないという数少い自然描写の一つである。それに川端は「少年」に

旅情と、また大阪平野の田舎しか知らない私に、伊豆の田舎の風光とが、私の心をゆるめた。そして踊子に会つた。

といふ。経済のみにささくれ立つ心貧しい村人の田舎では「私の心をゆるめる」やうな「伊豆の田舎の風光」はとても成立しない。この立札はもともと村の貧しさなどを示すものではなく、物乞ひの胡散臭さ、執拗さに辟易し、旅芸人の風俗紊乱を憂慮した純樸な村人の防護壁なのである。実際旅芸人に現をぬかして、果は家出にまで及ぶ不幸をみた村の男女は何処にも多分にあつた事実である。それは何よりも他ならぬこの「伊豆の踊子」に峠の婆さんの言葉として現はれてゐる。

「あの芸人は今夜どこで泊るんでせう。」
「あんな者、どこで泊るやら分るものでございますか、旦那様。お客があればあり次第、どこにだつて泊るんでございますよ。今夜の宿のあてなんぞございますものか。」

といふ「甚しい軽蔑を含んだ婆さんの言葉」はげんに「私」を「それならば、踊子を今夜は私の部屋に泊らせるのだ、と思つた程私を煽り立て」てゐる。つまり良風美俗を紊す軽蔑すべき邪悪なもの、不幸を村に齎すもの、しかし又一方力なく一片の紙切れや立札で村の入口から追払はれるもの、道祖神にやらはれる疫病神の如き哀しきものとして旅芸人を遇してゐるもの、即ちこの立札であると解した方が、村の経済とは縁なきものとする方が、より妥当である。経済的拒絶の徴標と見るより、ともすれば物乞ひ旅芸人に同情し、抱擁しさうな村人の哀しい禁忌の標と見るのである。

(二)

さて、「あんなもの、どこで泊るやら分るものでございますか」の言葉を口に出したのは、長年中風を患ひ全身不随の、水死人のやうに蒼ぶくれしたからだで炉端にあぐらをかいて動かず、峠を越える旅人から聞いたり、新聞の広告を見たりして、全国から中風の療法を聞き、売薬を求めて、それ等の手紙や紙袋を一つも捨てずに身の周りに置いて眺めて暮す爺さんを介抱しながら、「秋でもこんなに寒い、そして間もなく雪に染まる峠」に孤絶して暮す婆さんである。この茶店が臨む、「私」が肌に粟粒を拵へ、かちかちと歯を鳴らし身顫ひして覗いた美しいが目の届かない程深い谷が象徴する直ぐ身近に迫る死を前に、生にしがみつくあらゆる苦闘に堪えてゐる爺さんによりそひ離れぬ婆さんである。ここに描き出されるものは生へのあくなき執着もある、しみじみと心あたたまる老夫婦の愛情もある。しかし注目すべきは第一に中風を患ひ全身不随といふ暗い不幸の影を背負ふ爺さんとそれを介抱し世話して長年捲むことを知らぬ婆さんの孤絶した生活である。これ以外に生活手段のない老夫婦の愛情と簡単に割切ればそれまでであるが、ここでは特に婆さんの行為には「雪国」に頻出する語、駒子の愛情について言はれる「徒労」――つきつめて言へば徒労を敢てする所に哀しさと美しさが生じるといふこと――といふ語が適合することと、爺さんが暗い不幸の影を背負ふ人間であることの二点である。「徒労」に着目すれば遠く「雪国」に連なり、又暗い不幸の影を負ふ人に注目すれば、川端作品の登場人物は処女作招魂祭一景以来、曲馬団の娘・レビューガール・温泉芸者・死刑囚の娘、或はこの伊豆の踊子の様に旅芸人、そうでなくとも何か暗い哀しい不幸の影を背負ふ人間であり、これは殆んど総ての作品を通してみられる特色といへるからこの所は川端作品の特色を露はに示してゐるといへる。いふなれば負ひ目を持つ人間に徒労な愛情を敢て捧げる所に哀しさ美しさが露はになるといふ点でこの所は川端作品の特色を示す例外ではない。第二にこの爺さん婆さんの孤絶した生活が「十六歳の日記」に見る祖父と川端の生活に連なることである。「十六歳の日記」に見る如く、川端は中風を患ひ、全身不随で排尿にさへ痛みを覚える盲目の祖父の尿瓶の世話をしながら、二人きりの生活をしたのであり、「十六歳の日記」はこの記録である。天城峠の老夫婦の描写はこの「十六歳の日記」の延長線上にあるといつてよい。「十六歳の日記」はそのあとがきに、

十年後にこの日記を作品として発表することにならうとは、無論夢にも思はなかつた。作品としてとにかく読めるのは、この写生のせゐである。

とあり、また「南伊豆行」には

峠のトンネルに入る。その北口の茶店が見えない。『伊豆の踊子』に書いた茶店だ。婆さんと中風の爺さんがゐた茶店だ。あの家もなくなつてしまつた

か、爺さんも死んだのか、なぞと思ふ。自分は八年振りで天城を越えるのだ。

と書いてゐるから、そのいづれもが川端の経験した事であらうが、「十六歳の日記」に

テーブルの抽出しを掻き廻してゐると「構宅安危論」が出て来た。これは祖父が口述し自楽に筆記させたものである。出版しようと努力し、豊川にも相談されたが駄目だつたこの草稿、今は全く忘れられて私の机の奥に引籠つてゐる。ああ祖父は一生の間何一つ志を遂げず、手を下したことは何もかも失敗ばかり、その心中はどうだらう。

祖父の薬が不思議な利目を現はしたことは事実でした。ですから祖父はこの薬を世に広めたいと考へるやうになりました。そしてその後自楽に願書を書かせて三四種の薬を売り出す許可を内務省から得ました。しかし東村山龍堂といふ屋号のやうなものを印刷した包紙を五六千枚印刷したぐらゐのことで、その製薬の仕事は立ち消えになつてしまいました。これらの薬が死ぬまで祖父の頭にあつたのです。薬の外にも「構宅安危論」の出版のことなぞを考へてゐたのでせう。

とあるのを見ると「伊豆の踊子」の身の周りに古手紙や売薬の紙袋の山を築き、その紙屑のなかに埋もれてゐる峠の爺さんが彷彿とする。一方は売薬を売り、原稿を世に出さうとし、他方は中風の療法の便りを集め、売薬の袋さへ保存するといふ差はあつても病床に動けぬ身が紙屑にとりつかれ焦躁苦慮する凄まじさ、哀れさは同様である。人はよく「十六歳の日記」について

「ああ、ああ、痛た、いたたつたあ、いたたつた、あ、ああ。」おしつこする時に痛むのである。苦しい息も絶えさうな声と共に、しびんの底には谷川の清水の音。

を取りあげてその非情な清々しい描写に早くも花開く川端の資質の早成を見るが、それもよい。しかしここでは生きようとして苦悩する全身不随の老人を描くに、これをいたはつて倦まない女によつて描いてゐることに注目せねばならない。「伊豆の踊子」では爺さんを描くに峠の婆さん、やがて雪に染む天城の峠にふみとどまつて爺さんとの孤独の生活を辞さない婆さんである。

「こんなお恥しい姿をお見せいたしまして……でもうちのぢぢいでございますから御心配なさいますな。お見苦しくても、動けないのでございますから　このままで勘忍してやつて下さいまし。」

かう断る言葉にもしみじみとあたたかい、しかし哀しい心根のにじみ出る婆さんによつて描いてゐる。これは既に「十六歳の日記」に「おみよ」によつて祖父を描いてゐたことを注目さす。「おみよ」といふのは「日記」中に

おみよといふのは、五十歳前後の百姓女です。毎晩自分の家から通つて来て、煮焚きその他の用事をしてゐてくれました。

とあり、また「日記」のあとがきに

祖父が親戚に見せるのも不安に思つて最も信頼してゐたおみよの家に預けた、私の家の系図も、今日までおみよの家の仏壇の抽出しの中に鍵をかけたままで、見たいと思つたこともない。

と書いてゐる女である。その婆さんによつて祖父は、例へば次の様に書かれる。

――祖父のやさしい心は時々現はれる。今朝もおみよが、

「子産れ餅を三十軒拵へときましたが、思はん所からお祝ひをくれはるので足らんやうになりました。また拵へんなりません。」と言ふと、

「さうか、三十軒か。まだその上にか。この五十軒足らずの村で、お前とこみたいな家やのに、そない方々からお祝ひが来るか。」

後は何やら、泣声に涙が交つて嬉し泣きしてゐられる。(おみよのやうな貧乏な小作農の家でありながら多くの家から祝ひが貰へたことを祖父は喜んでやつたのです。)

病に苦しむ老人とこれをいたはり介抱する幸薄き老女とが共にささやかな人の情に喜び泣くさまを描いてまこと哀しくも心あたたまる美し

さである。老人を描くに老女を以てするこれ天城の峠の茶店に連なるものである。

(三)

人生幸運の道を歩んだとは思へない老人、その道程の終りに近づいて、生きるための苦闘に喘ぐ老人と老女を描いて、あたたかく哀しく美しい情感を滲み出す所「十六歳の日記」と「伊豆の踊子」と相通ずると押へておいて、「十六歳の日記」ではこの祖父が最愛の孫でしかも現在世話になつてゐる唯一の肉身の「私」に時に悪態をつくことに注目する。

おみよが祖父を慰めて言ふ。

「皆の不運です。けど、ぼんが出世しなはつたらよろしよまつしやないか。」

「出世言ふたかて高が知れてるが。」と高い声を出して私を睨む。

「この人間界で、僅か中学をまだ卒業せんくらいではな。あぁ」

祖父は今日は馬鹿に私を見下げる。

愛しい者にしか悪態もつけない老人の哀れさ胸を打つ記録である。これは「伊豆の踊子」の峠の茶店の婆さんの言葉「あんな者、どこで泊るやら分るもので云云」を想起せずにはゐられない。この言葉は婆さんは店に出て旅芸人の女と話してゐた。

「さうかねえ。この前連れてゐた子がもうこんなになつたかい。いい娘になつて、お前さんも結構だよ。こんなに綺麗になつたのかねえ。女の子は早いもんだよ。」

小一時間経つと、旅芸人たちが出立つらしい物音が聞えて来た。

旅芸人一行と婆さんは小一時間も親しく話す「この前」からの知り合ひだつたのである。祖父と「おみよ」との間に漲る温かい情感が記されて後、愛しい「私」に対する祖父の「馬鹿に私を見下げた」言葉がある如く、峠の爺さん婆さんのしみじみとした情感と婆さんの小一時間もの旅芸人との親しい話の後に、軽蔑の言葉がある。この点でも「十六歳の日記」と「伊豆の踊子」の連なりを見るが、ここで注意すべきは「馬鹿に見下げた」、或は「甚だしい軽蔑を含んだ」といふ言葉は憎悪・拒絶・排撃といふやうな乾燥した対立意識におよそ縁遠いことである。むしろしみじみとした情感の通つた哀しさが底を貫いて流れてゐる。でなければ「私」を「踊子を今夜は私の部屋に泊らせるのだと思つた程」煽り立てることはあるまい。単に婆さんの軽蔑に反撥しただけではこうは煽り立てられない。それに婆さんが反撥を買うには純樸で哀しすぎる。むしろ逆に情を誘ふものがあつたのである。

踊子との旅は天城峠の茶店の邂逅に始まり、下田街道に終る。下田の町は「『伊豆の踊子』の作者」に

下田は伊豆半島を北から南への旅の終点であるし、「下田の港は、伊豆相模の温泉場なぞを流して歩く旅芸人が、旅の空での故郷としてなつかしがるやうな空気の漂つた町なのである。」から学生と旅芸人といふ旅の道づれは、下田に着けば終るのではなかつたか。ここで旅芸人たちは仲間のなかにもどり、学生は仲間をはづれたのである。学生の旅は終り、旅の小説は終るところであつたらうか。

とある如く、別れの場にすぎない。この下田街道の終り近くあの感動的な千代子と踊子の会話がはじまる。

「いい人ね」

「それはそう、いい人らしい」

「ほんとにいい人ね、いい人はいいね」

そして「世間尋常の意味で自分がいい人に見えることは言ひやうもなく有難いのだつた。」といふことになり、「山々の明るいのは下田の海が近づいたからだつた。私はさつきの竹の杖を振り廻しながら秋草の頭を切」るといふ明るく童心にかへつた描写に続いて、前述の二行

途中ところどころの村の入口に立札があつた。

――物乞ひ旅芸人村に入るべからず。

で旅は終るのである。かういふ続き具合だからこの立札は経済的原因による拒絶を示すものでなく、むしろ情感の上では、ともすれば受け入れさうになりがちなものに対する禁忌の標とするのである。でこれに流れるものはしみじみとした哀しさであるし、これが「伊豆の踊子」全篇を引き締める役割を果たしてゐることにもなる。

さて又この旅の中間点、事件らしい事件が展開するのは湯ケ野である。ここで下田まで同行するため出立を一日延ばした「私」と旅芸人は非常に親密になり、遂に栄吉は一行の真実の身上話を語り、「ひどく感傷的になつて泣き出しさうな顔を」したりする。「私」の宿へ栄吉が来て暫くすると女たちも皆橋を橋つてどんどん二階へ上つて来て一時間程遊んで若い女三人はこの宿の内湯へ行くが、「私」に一緒に入らうとしきりに誘ふのである。後からゆくと私がごまかすと、踊子が一人直ぐに上つて来て、「肩を流してあげますからいらつしやいませつて姉さんが、」と千代子の言葉を伝へるのである。「好奇心もなく、軽蔑も含まない、彼等が遊芸人といふ種類の人間であることを忘れてしまつたやうな私の尋常な好意が」彼等の胸に泌み込んだことをまざまざと示すものである。若妻とはにかみ盛りの娘二人に、若い女であるといふ事すら意識に上らせない程に切羽詰まつた、「私」にお礼がしたい一心の、感謝一途の言動である。この機会をとらへ、かうでもしなければ彼女等は「私」に感謝の方法がなかつたのである。哀しいことである。切なく心あたたまる美しいことである。そして直ぐこの後に、

この日も栄吉は朝から夕方まで私の宿で遊んでゐた。純朴で親切らしい宿のおかみさんが、あんなものに御飯を出すのは勿体ないと言つて私に忠告した。

が続く。純朴で親切らしい宿のおかみさんの言葉である。峠の婆さんの「あんな者云云」の言葉同様「甚だしい軽蔑を含んだ」言葉といへる。しかしこの宿のおかみさんも、栄吉が案内した「私」を客として泊めてゐるのだし、「私」の道連れにしてもとにかく直ぐ栄吉が内湯に入るのを許してゐる。翌日も朝から栄吉は「私」と内湯に入つてゐる。其夜は芸人の娘三人も「私」の部屋で十二時過ぎまで遊び、翌日も出立を延ばした「私」の部屋で栄吉も芸人の女達も遊び内湯に入つてゐる。勿論栄吉は朝から晩まで「私」の宿に遊んでゐたわけである。宿のおかみさんに芸人を拒絶する気持があればかうはゆかない筈である。にもかかわらず、「あんな者に云々」なのである。ここに哀しさがある。

峠の婆さんは特殊の環境の一人が「私」といふ客一人の質問に単なる観測情報を提供したに過ぎない。勿論「今夜は私の部屋に泊らせるのだ」と思つた程「私」を煽り立てたが、とにかく芸人を軽蔑すべきものとして情報提供したに過ぎない。湯ケ野の宿のおかみさんは、親切な素朴な一般人として、積極的に、具体的に栄吉に対する私の行動を制止したのである。天城峠の場合より一層具体的で印象鮮明である。しかし一人が一人に対する言葉で直接芸人に対したものでない。下田街道の立札は村といふ多数一般者が公然と、しかも直接芸人に対して、その行動を制止する、公衆の目に触れる文字である。その印象一層強烈鮮明である。天城から下田へ道は下るが、芸人に対する哀れの情感は逆に高まる様に描かれてゐるのである。「私」と芸人との親密さが増すにつれ、踊子の「私」に対する「女としての淡い恋心」が高まるにつれて、旅芸人に対する軽蔑は強く広く描かれるのである。旅芸人に対する軽蔑が鮮明になればなる程、即ち旅芸人が哀れになればなる程、「私」の踊子に対する好感、「素直で単純な感謝」が露はになつてくるのである。要するに「十六歳の日記」とこの「伊豆の踊子」とに連なつて考へられることは、心あたたまる親密さと軽蔑――

哀しいことである――がともどもに語られるといふこと、それによつて哀れさ美しさが露はになつてゐるということである。

(四)

ここでこの軽蔑の底に憎悪・拒絶・排撃の心が流れてゐないことを再考したい。この軽蔑は対立意識をもたない、むしろともすれば抱擁し受容しさうになる心の傾き――同情・同感・許容――とかいふものを押へようとする禁忌の言葉――道徳といふものはさういふところがある。この旅芸人に対する言葉には道徳的嫌忌が確かに含まれてゐる――と考へられる。ともすれば破りやすいこの禁忌を彼等は人生の嶮路に倒れてか、己の感情に溺れてか破つており、一般人は破つた彼等を軽蔑――禁忌の言葉を言ひ立てる――することによつて踏み越えまいとする。この軽蔑は反つて人の心の弱さ、脆さ、哀しさを示してゐるのである。だからこそしみじみと温い情愛と組合されて、しみじみとした情感が露はになるのである。これあつてこそ峠の婆さんの情も、宿のかみさんの親切も浮び出てき、旅芸人一行の好意も、踊子の淡い恋心の有難さも心に泌みてくるのである。これは何とも哀切なことである。なほ軽蔑する側に対立意識が無いと同様、軽蔑される側も「いはゆる旅芸人根性などとは似もつかない、野の匂ひがある正直な好意」を持つたものであつて、ひねくれも、嫉みも、反抗もない、肉親らしい愛情で繋り合ふ、世智辛さのないものに描かれる。軽蔑に対する旅芸人の反応は一切書かない。「私たちのやうなつまらない者」といふごく普通の謙辞以外卑下の言葉すらない。身の不運や社会に対するうらみ言の一つもない。作者は「好奇心もなく、軽蔑も含まない彼等が遊芸人といふ種類の人間であることを忘れてしまつて」書いてゐるのではないか。心して対立意識に根ざす総てのことを消去するのではないか。川端は招魂祭一景に曲馬団の娘を描いて以来、浅草紅団・雪国・女であること・みづうみと社会の底辺に呻吟する人々、暗い不幸の影を負ふものを描いて絶妙である。しかしそのいづれもが対立意識、所謂社会性を丁寧に払拭してあること、むしろこの対立意識を払拭する所にはじめて、しみじみとした哀しさ、あたたかさを現出し、そこにこそ美を創造してゐることに注目すべきである。これ川端の文学の一面と言ひ得る。この点「伊豆の踊子」は「十六歳の日記」にその源流をもち以後の川端文学の先駆をなしてゐる。対立意識、階級意識、利害関係、もつと川端に即して言へば人間のみを尊しとする考すら除去しきつた所に、ありがたさ、けがれなき美しさが現出するのは「抒情歌」や「空に動く灯」に生のまま出てゐる川端の文学精神、万物一如・輪廻転生の思想の一面の必然のあらはれである。例へば「抒情歌」に

科学者は物質を造るもとともいふべきものをこまかくたづねてゆけばゆくほどそのものは万物の間を流転すると知らねばならなくなつたではありませんか。魂といふ言葉は天地万物を流れる力の一つの形容詞に過ぎないのではありますまいか。

輪廻転生の教へほど豊かな夢を織りこんだおとぎばなしはこの世にないと私には思はれます。人間が作つた一番美しい愛の抒情詩だと思はれます。もともと東方の心なのでせうけれども、西方にも動物や植物への転生の伝説は星屑よりも多いのであります。

昔の聖者達にいたしましても、近頃の心霊学者達にいたしましても、人間の霊魂のことを考へました人達は、たいてい人間の魂ばかりを尊んで、ほかの動物や植物をさげすんでをります。人間は何千年もかかつて、人間と自然界の万物とをいろいろな意味で区別しようとする方へばかり、盲滅法に歩いて来たのであります。そのひとりよがりの空しい歩みが、今になつて人間の魂をこんなに寂しくしたのではありませんでせうか。

私は失つた恋人よりも失つた愛の心を悲しみました。さうして読みました

のが輪廻転生の抒情詩でありました。その歌に教へられまして私は禽獣草木のうちにあなたを見つけ、私を見つけ、まただんだんと天地万物をおほらかに愛する心をとりもどしたのでありました。

とある如く、万物は、万物のもととなるものの輪廻転生の一時のあらはれにすぎないから、万物は一如である。一如であるから人間のみ尊しとするは本来誤りであり、けがれである。人間と自然界の万物とを区別しようといふ盲滅法のひとりよがりの空しい歩みが人間の魂を寂しくしたのであり、仏法のありがたい抒情詩すらこの点けがれてゐるといふ。ここには一切無差別が語られ、差別・区別いはんや対立抗争の如き、人間の魂を寂しくけがれたものにするに過ぎない。ありがたさ、あたたかさ、総じて愛の心をとりもどさうとすれば、輪廻転生・万物一如の教へに耳を傾ける以外に道は無い。ここに川端の文学の心がある。

さて差別・区別・対立これ等一切のもの――つきつめれば社会的羈絆といふものも――を丁寧に周く除去し去つた人間関係はどういふことになるか、それはめぐり合ひ、有難き出合ひといふことになる。いや人ばかりでない、自然に対しても同様のことになる。「雪国」の島村の様に、これによつて人間はその生生しき具象性を失ひ夢幻的にすらなる。此の危険を敢て川端は冒すのである。「牧進讃」に

人間の一生は邂逅、めぐりあひである。……美しいのは今日今時の私である老若先後無く、二人が現時今人の幸ひによる。

とある。人生これ邂逅めぐりあひであり、美は今日今時のめぐりあひにあるといひ、「美しい日本の私」に

四季折り折りの美に、自分が触れ目覚める時、美にめぐりあふ幸ひを得た時には、親しい友が切に思はれ、このよろこびを共にしたいと願ふ、つまり、美の感動が人なつかしい思ひやりを強く誘ひ出すのです。この「友」は、広く「人間」ともとれませう。

美は人生と同じく、めぐりあふ幸なのであり、人なつかしい思ひやりを強く誘ひだすものなのである。そして、「美の存在と発見」には

食堂で朝の光りによる、ガラスのコップの美しさを見つけたのです。確かに見たのです。この美しさに、はじめて出合つたのです。これまでにどこでも見たことがないと思つたのです。このやうな邂逅こそが、文学ではないでせうか。また人生ではないでせうか、……コップの、これに似た美しさはもちろんありますでせう。けれどももしかすると、これとまつたく同じ美しさは、よその土地、ほかの時間には、ないかもしれないではありませんか。少なくともわたくしはこれまでに見たことはありませんので「一期一会」と言へるかもしれません。

ここに明瞭に川端はめぐりあひ・邂逅こそ人生であり、文学であり、そこにこそ美があり、一期一会とは正にこのことであると言つてゐるのである。

(五)

人生は邂逅・めぐりあひであり、めぐりあひ・邂逅に美があり文学がありあたたかさがあり、一期一会とはこれであるといふ川端の美しさとは如何なるものか「ほろびぬ美」に

私はもう日本のかなしみしか歌はないと敗戦ののち間もなくに、私は書いたことがある。日本語では「かなしみ」とは、美といふのに通ふ言葉だが、その時は、かなしみと書く方がつつましく、またふさはしいと思つたのであつた。

即ち美はかなしみなのである。「美しさと哀しみと」といふ作品のあるは偶然のことではない。又

私が親しんだ「源氏物語」や室町時代の文学は、戦争を忘れさせ、また、戦時を凌がせる美であつた。その室町時代では、金閣寺の足利義満将軍よりも後の銀閣寺の義政のいわゆる東山時代の文学芸術に私は惹かれた。長い戦乱による荒廃・惨苦・窮乏の京都での美の伝統の保存・渇望・創造が戦時の私に通つたからであつた。

と言ひ、隠岐の後鳥羽院、佐渡の順徳院の悲愁を、西行を明恵上人を、明月記の定家を、実隆公記の三条西実隆を語つて、哀しさ美しさは泰平ムードの中になく、その名の如く満ち足りた栄耀絢爛の義満の金閣になく、政界遊泳巧妙常に権門の尊崇を一身に集めた天龍寺・鹿苑寺の夢窓疎石になく、荒廃、惨苦、窮乏の義政の銀閣にあり、挫折、流離、悲愁の後鳥羽院や哀傷慈悲の明恵上人、時代の争乱に苦しむ伝統護持の実隆にあることを明らかにする。それ等は皆不幸の影を負つた哀しいものといつてよい。要するに川端の美は逆境の中に光るものであつたのである。ここで「思ひ出すともなく」に次の如くあるのは注目すべきである。

私の人生でのもろもろのありがたいめぐりあひは孤児であつたから恵まれたのではないかとも思ふ。恥づかしい秘密のやうなことであるが、天涯孤独の少年の私は寝る前に床の上で、瞑目合掌しては、私に思愛を与へてくれた人に心をこらしたものであつた。そのやうな人に、私は終始、つぎつぎとめぐりあひつづけて、絶える時がない。今も私は時折り寝床のなかで、なんとなく合掌する癖の出ることがあるが、神仏に礼拝するのではなく、やはり、感謝に礼拝する思ひである。

人ばかりではない。たとへばノオベル文学賞なども、私はめぐりあはせだと思つてゐる。

孤児であつたが故にありがたいめぐりあひがあり、心をこらして思愛を与へてくれた人に合掌するといふ。孤児といふ逆境の故にありがたきめぐりあひ、人生がある、感謝に礼拝するといふ、ここで文学的自叙伝の次の語を想起せねばならない。

私は幼くから孤児であつて人の世話になり過ぎてゐる。そのために決して人を憎んだり怒つたりすることの出来ない人間になつてしまつてゐたが、また私が頼めば誰でもなんでもきいてくれると思ふ甘さは、いまだに私から消えず、何人からも許されてゐる。自分も人に悪意を抱いた覚えはないといふやうな心持と共に、私の日日を安らかならしめてゐる。それは私の下劣な弱点であつたと考へられぬこともないがどんな弱点でも持ち続ければ、結局はその人の安心立命に役立つやうにもなつてゆくものだと、この頃では自分を責めないことにしてゐる。

幼くより孤児であつたため人の世話になり過ぎ決して人を憎んだり怒つたりすることの出来ない人間であり人に悪意を抱いた覚えはないといふ。川端の文学が憎悪・反抗・怨恨、およそ対立意識といふものと縁遠いのはこのあたりに原因するのである。さて孤児であつたが故に人の世話になる——之はあたたかさを感じ、感謝を覚えることである——しかし依然として孤児は孤児であり哀しみである。孤児なるが故にありがたきめぐりあひに恵まれたといふことは、あたたかき、礼拝すべき人生に恵まれたといふこと、そこに美と文学が産まれたといふことになる。かかるが故に逆境にある後鳥羽院や明恵上人、義政、総じて戦乱の中世——金閣でなく銀閣——の文学の流れに身を置かうといふのである。してみれば「伊豆の踊子」もその例外であるわけはない。

旅芸人を描いて所謂社会性、憎悪・怨恨・反抗総じて対立意識を丁寧に除去し消去し、むしろその世に容れられぬ逆境をしみじみと描き、それによつて孤児感情に苦しむ「私」との「めぐりあひ」を「人生」を描き、美を哀しさを、「ありがたさ」「感謝」の文学をなしてゐるのである。この点において「伊豆の踊子」は「十六歳の日記」の系譜に連なり、遠く源氏物語に源泉をもつ中世文学の流れに漂ふものである。要約して「愛しみ」の文学といへる。

——昭和四十八年三月二十二日——